秦 郁彦　『南京事件』（中公新書）

「そうでしょうね。一度覚悟なさった以上は……」と会話を交わしたという。それから松井はや
や興奮気味に語りはじめた。（死刑直前）（花山教誨師）（大将）

「南京事件はお恥ずかしい限りです。……私は日露戦争の時、大尉として従軍したが、その
当時の師団長と、今度の師団長などと比べてみると、問題にならんほど悪いですね。日露戦
P.45 争のときは、シナ人に対してはもちろんだが、ロシア人に対しても俘虜の取り扱い、その他
よくいっていた。今度はそうはいかなかった。

慰霊祭の直後、私は皆を集めて軍総司令官として泣いて怒った。そのときは朝香宮もおら

軍の最高指揮官が、天皇の幕僚長からこの種の要望を受けたのは異例で、事実上の「戒告」*に相当するといってよいだろう。

* 陸軍懲罰令には戒告（正式には譴責）は将官に対しては適用しない、と規定されているが、参謀総長の松井司令官に対する「要望」を起案した河辺作戦課長は著書のなかで、「松井大将宛参謀総長の戒告を読んだ大将は『まことにすまぬ』と泣かれたと聞いた」（『河辺虎四郎回想録』）と書いている。

P.173

「郷土部隊奮戦記」（『サンケイ』栃木版　昭和三十八年）によると、問い合わせは山田連隊長から秋山旅団長へ、さらに末松師団長へとリレーされたのち、十三日午後になって処分命令が届く。（12月）（歩兵66連隊 陳弁一）

「午後二時零分聯隊長ヨリ左ノ命令ヲ受ク

左記

イ、旅団命令ニヨリ捕虜ハ全部殺スベシ、其ノ方法ハ十数名ヲ捕縛シ逐次銃殺シテハ如何

P.158

それどころか、石射猪太郎（外務省東亜局長）のごときは、現地の領事から「南京アトロシテーズ」に関する報告を受け、陸軍に厳重措置するよう申し入れ、下火になったと述べ、弁護人から「アトロシテーズ」の内容をただされると、「それは南京に入城したわが軍による強姦・放火・掠奪」だと率直に答え、検事側を利するような証言をさせる失敗をやっている。

P.35

しかし、異例の「戒告」も、南京の現地部隊に対してはさほどの衝撃にならなかったらしく、むしろ開き直りの姿勢で受けとめた感もある。

たとえば一月二日南京に入った阿南人事局長一行が中島師団長をなじると、「捕虜を殺すぐらい何だ」（稲田正純氏談）と反論されているし、四日にやってきた青木企画院次長一行に、やはり中島が平然と、「略奪、強姦は軍の常だよ」と語るので、文官の手前、恥ずかしくなった、と案内役の岡田芳政大尉は回想している。

P.174

（この間に（12/14?）お）ける摘発者の総数は明確を欠くが、第九師団が作成した「南京攻略戦闘詳報」は、「右翼隊主力ヲ以テ城内ノ掃蕩ニ当リ七千余ノ敗残兵ヲ殲滅セリ」と記し、さらに「南京戦ノ彼我ノ損害」として、「友軍　死者四六〇名、傷者一一五六名、敵軍死体四五〇〇、他ニ城内掃蕩数約七〇〇〇」とかかげている。

捕虜の数字がないので、約七千人の敗残兵（および便衣兵）は、ほぼ全員が殺害されたと推量してよかろうが、これは公式の戦闘詳報に記載された数字としては最大規模である。

P.137

これらの命令は、同じ頃国際難民区委員会から、「三人から七人の兵士の群が将校の監督もなくうろつきまわることから多くの事件が発生しています」（十六日付福田篤泰官補宛、第五号文書）とか、「夜間に徘徊する兵隊たちを締め出すように要請しましたが、この措置はいまだにとられていません……強盗・強姦・殺人行為を防止するため何らかの方法をとられることを希望するものであります」（十八日付日本大使館宛、第七号文書）という文書が提出されているのに相応するものであろう。

P.139

刺殺に参加した一兵士は、この日の日記に次のような鬼気せまる記事を残している。

「午後五時、南京外廓にて敵下士官兵六名を銃剣を以て刺殺す。亡き戦友の敵をとった。全身返り血を浴びて奴ののど笛辺りをつきたるや、がぶ血をはいて死ぬ。背中と云はず腰と云はず、刺して刺して刺しまくり、死ぬるや今度は火をつけてやる。中に、ウナリ乍ら二、三尺はい出すのがある。生温い血が顔にはねる。手を洗はず夕食を全く久し振りで食べる」

主要文献で見る虐殺数（単位：1000人）

文献	日付	a軍人	b民間人	計(a+b)	出所
抗敵報	1938.4.30			42	盧溝橋博物館蔵
M.S.ベーツ証言	1938	12	28	40	東京裁判でも証言
ジョン・ラーベのヒトラーあて上申書	1938.6		50～60		ラーベ『南京の真実』(1997)p.317
Battle of China (movie)	1943		40		米国の製作
a 東京裁判判決 b 東京裁判判決	1948.11.12 1948.11.12	50	12	200+ 100+	松井将軍への論告
中国軍事法廷判決	1947.3.10			300+ or 340	集団殺害190 個別分散殺害150
南京虐殺記念館				300	入口に表示
南京大学歴史学部				400	『南京大虐殺』(1982)p.146
台湾公式戦史				100+	History of the Sino-Japanese War (1971)p.213
洞富雄				200+	『南京大虐殺』(1982)p.146
秦郁彦		30	10	40	『南京事件』(1986)
a 偕行社 b 板倉由明 c 畝本正巳		16 8～11	16 5～8	32 13～19 3～6	『南京戦史』p.364, p.373,『軍事史学』26-1板倉論文(1990)
田中正明				きわめて少数	『"南京虐殺"の虚構』(1984)
樺山紘一				1000	『現代用語の基礎知識』(1996)
高校用教科書（山川出版社）	2002年版			数万～40	『詳説日本史』

参考新聞記事 一覧

	日付	出版元	タイトル	備考
1	2012.02.23.	毎日新聞	南京事件否定　河村氏撤回せず	
2	2012.02.28.	産経新聞	埼玉の上田知事河村市長に同調	
3	2012.02.29.	毎日新聞　夕刊	アルメニア人虐殺否定処罰法	8面